



ビジネス



芸

川崎ゆきお

「最近古い話をよく読んでいますよ」

「ほう」

「こうして町を歩いていても、それと重なったりします」

「ほう」

語っているのに、相手は乗ってこないようだ。仕事で一緒に取引先を訪問する途中で、二人は特に親しくはない。

「昔も使いは二人です」

「はあ？」

「だから、使者もそうですが、二人で行ったとか」

「私らは使者か」

「高岡さんが正使です。僕が副使」

「まあ、そうだね。一人でもいいんだけどねえ」

「だから、副使は監視役でもあるのです。正しく伝えたかどうかの証人でもあるのです」

「じゃ、君はお目付役のようなものか」

「いえいえ」

「じゃ、君のほうが偉いのか」

「そうじゃありません。僕は御供です。下僕だと思っていただいてもいい」

「しかし、目付だろ。監視役だろ」

「それは、まあ」

「心配するな。社の方針はしっかりと伝える。しかし、多少のさじ加減はいいだろ」

「それはもう、高岡さんのご自由に」

「じゃ、君は何処まで関わるんだ」

「だから、二人で行くのが約束事なので、それだけじゃないですか。それに一人じゃ押し出しが悪い。相手が一人なら二対一です。数で勝ってます」

「しかし、会議室に呼ばれたぞ。先方はもっと多いんじゃないのか」

「だから、それが分からないから、最低限二人で行くのですよ。高橋さん一人じゃ貧弱でしょ」

「誰が貧弱だ」

「いやいや、御供の一人ぐらい、いた方が何かと」

「まあ、そうだな」

「それに一人じゃ、力の入れようが足りないように思われます。二人で繰り出す。だから、いいんです。三人でもいいですが、部長は二人にした。その規模の話のためでしょ」

「君は誰だった」

「御供です」

「そうじゃなく、いつもどの部署にいる」

「専門です」

「ええ？」

「御供専用員です」

「そうだったか」

「どうせ、僕は何も喋りませんよ。横でじっとしています。それだけの要員です。今日の話も実は何も聞いていません」

「そうか、じゃ、君に相談しても仕方がないのか」

「適当に振ってください。適当に答えます。ある時は技術員、ある時には専門職のキャラに変身しますから」

「聞いても君は分からないのだろ」

「分かりませんが、僕に相談をするのは、先方の話が飲めないときでしょ。だから、小声で、適当に念仏を唱えてください。僕も念仏で応じます」

「君は、それだけを仕事にしているのか」

「はい。同じ部署から二人出すのは、もったいないですから」

「君は普段、何処の部署だ」

「御供課です」

「あるわけないだろ」

「しかし、古い本を読んでいると、やはり二人一組なんですよ」

「また、その話か。しかし、どうして、そんな君のような要員を作ったのだろうねえ」

「教育でしょ。まずは交渉現場に慣れることだと思います」

「内容も分からないのに参加する。それは座敷芸のようなものじゃないのか」

「いいですねえ。それ。じゃ、御供課じゃなく、お座敷課に変えるよう言っておきます」

了